

秋夜の月

清くさやけく聞ゆなり
大空遙に見渡せば
縁の空は彌高く
雲の底ひは彌深く
みなぎらひたる真中を
無心の月は皎々こ
輝き渡り地の上の
總てのものを照しけり
吾等一行はこの丘に
月を愛でつゝ虫聞きつゝ

花の色香を稱へつゝ
歌詠みあそぶ折もあれ
一天俄にかき曇り
黒雲四邊を包みつゝ
白銀なせる月かげも
星ものこらず呑みほして
闇のかたまり地に落ちぬ
暗さはくらし吾々は
聲を力にかたり合ふ
時しもあれや訝しき

露の路

秋夜の月

譏りの婆アがあらはれて
口を極めて嘲笑する
われ等はこゝに意を決し
天地の神を伏し拜み
生言靈を宣りつれば
さすがに猛き鬼婆も
忽ち旗を巻きをさめ
いづくともなくかくれけり
再び月は皎々
雲を洗ひて出でましぬ

月見ヶ丘の草も木も
百花千花虫のかげ
手にさる如く見えければ
天の恵みこ勇みつゝ
秋の尾花の歌よみて
その夜は漸く明けにけり
譏り婆アの住むこいふ
火炎の山に進まむこ
吾等は一行五人連れ
尾花の露をかき分けて

こゝまで漸く來りけり
あゝ惟神々々

神の光に守られて

曲の征途に進むこそ

これにましたる幸はなし

進めよ進め、いざ進め

松、竹、梅をはじめし

櫻も勇めこの首途

松は先頭に立ちて歌ふ。

『惡龍猛り濕虫はをさる

萱草生ふる中道を

皮の衣に身を固め

われら一行五人連れ

高光山に進むなり

行く手の道は遠くとも

惡魔は如何にさやるとも

われ等はおそれ大丈夫の

まことの力をあらはして

神の依さしの神業に

勇み進むで仕ふべし

道の行く手にさやりたる
闇の中なる鬼婆も
生言靈にやはられぬ
いざこれよりは言靈の
水火をますく清めつゝ
神を眞の力とし
まここの教を杖こして
如何なる悪魔の捕手にも
撓まず屈せず進むべし
冬男の君の御行方

探ぬるまでは何處までも
後へは引かぬ大丈夫の
高き心は桑の弓
通さにやおかぬ大和魂
守らせ給へ天津神
國津御神の御前に
心を清めて願ぎ奉る
あゝ惟神々々
今日の首途に幸あれや
わが言靈に光あれ

竹は歌ふ。

『高光山の麓まで』

國形見むこ進みます

秋男の君に従ひて

花咲き匂ふ秋の野を

虫の鳴く音におくられて

進み來れば晝月の

かげは御空に白々こ

浮ける姿に秋は來ぬ

秋日短かく黄昏れて

道の行く手にあたりたる

月見ヶ丘の聖場に

一夜をあかし諸々の

善事曲事見聞きしつ

樹下のやぎりも早あけて

今日は樂しき旅衣

悪魔の征途に進むなり

冬男の君の御行方

草を分けても探し出し

安否を君に報ずべし

若しも曲津に亡ぼされ
 あの世の人となりまさば
 何ぞ詮術なけれども
 必ず仇を打ちきたため
 君の恨みを晴らすべし
 譏り婆アの言の葉に
 冬男の君は鬼婆に
 謀られ身亡せ給ひしこ
 聞く言の葉の真ならば
 吾等は黙してあるべきや

吾等が力のある限り
 生言靈のつづくだけ
 打ち出してきため斬り拂ひ
 この葭原の國原を
 うら平けくうら安く
 拓かにおおかぬわが心
 うべなひ給へ天地の
 神の御前に願ぎ奉る』

梅は歌ふ。

『尾花の香り彌清く』

秋夜の月

匂ふ小路を辿りつゝ
毒龍イヂチをさけながら
君の御供に仕へゆく
今日の旅路の勇ましき
秋は漸く更けにつゝ
百草千草は花ひらき
芳香四方に薫ずなり
空ゆく鳥の翼まで
秋陽をあびてぴか／＼と
御空の玉に輝けり

櫻は歌ふ。

あゝ勇ましや勇ましや
吹く風清き秋の野の
旅ゆく吾は村肝の
心の駒も勇み立ち
身の疲れさへ忘れけり
あゝ惟神々々
秋野の旅に幸あれや
わが生言靈に力あれ

「吹く風清く空高く

駒は勇みて嘶ける
 水上山を立ち出でて
 君の御供に仕へつゝ
 一夜の露の草枕
 やうくこゝに明け初めて
 火炎の山を目あてし
 悪魔の征途にのぼるなり
 水奔草の毒葉に
 當てられ身亡せ水奔鬼
 彼方此方にひそみたる

あやしき野邊を進むなり
 吾等は神の子神の宮
 如何なる曲もさやるべき
 草葉にすだく虫の音も
 林に囀る鳥の音も
 谷川流るゝせゝらぎも
 吾に力を添ふる如
 進めくさ響くなり
 あゝおもしろや樂もしや
 秋男の君に従ひて

御樋代神のあれませる
 高光山に舞ひのぼり
 四方の國形見渡して
 これの大野を開くべく
 進みゆくなり天津神
 道の隈手も恙なく
 守らせ給へご願ぎ奉る
 あゝ惟神々々
 わがゆく旅に幸あれや
 わが言靈に力あれ

ご歌ひつゝ、一行五人勇ましく進む折しも、俄に咽喉渴き堪へ難くなりけるが、こんもりと生ひ
 繁りたる常磐樹の蔭に、さゝやかなる茶店の如きものありて、四五人の若き乙女手を翳し、一
 行を招き居たりける。

(昭和九・七・二七 舊六・一六 於關東別院南風閣 内崎照代謹録)

吾は今神聖運動に拍車かけて

御國の秋の旅を續くる

吾にして立たずば御國の同胞の

なやみを救ふ世は來るまじ

第一〇章 五 乙 女 (二〇一四)

一行は森蔭の小やかなる家に立寄り見れば、五人の乙女、笑を満面に浮べて一行を迎へ入れ旅の疲れを此の破家に休ませ給へし勸める。此女の名は、秋風、野分、夕霧、朝霧、秋雨といふ。

『秋ながら旅の疲れに汗出でぬ』

この破家に休ませ給へ。

松のひゞき萩吹く風のさやくに

響きてさむき秋なりにけり。

秋風の吹き通るなる此館に

暫しは汗をぬぐはせ給へ』

秋男はこれに答へて、

『秋されば涼しきものを汗ばみぬ』

この森蔭に休らひ行かむか。

一時をこれの館に休らひて

吾は力を養はむこそ思ふ。

願はくば只一時の休らひを

これの館に清く許せよ』

こいひながら一行を引連れ、柴の戸をくゞりて奥に入るや、表より見たる破家に引替へて、美はしき廣き居間、幾つともなく並び居たりしに、

「思ひきやこの破家に斯の如

美しき廣き居間のあるきは。

暫くをこれの館に休らひつ

勇み火炎の山に進まむ」

松は歌ふ。

「草を分け坂を辿りて吾足は

軽き疲れを覚えけるかな。

この家に息を休めて魂を

よび生かしつゝ進み行くべし。

不思議なる館なるかも表は

案に相違の居間の数々。

もしやもし譏り婆アのたくらみに

かゝりしものか案じらるゝも」

竹は歌ふ。

「譏り婆の館なりしは幸ひよ

幸ひ真晝のここにありせば。

此家に譏り婆アがひそむなら

生命かぎりに戦ひて見む。

此家の表に乙女五柱

立てるも一つの不思議なりけり。

鬼婆の潜める館に思はれず

斯かる優しき乙女住むやを」

梅は小首を傾けながら歌ふ。

「悪神の良に入りしか何もなく

吾魂は落着かぬかも。

八十曲津神の住家を知るならば

力限りに戦ひて見む。

悪神は優しき乙女を見せかけて

吾等が生命を窺ひ居るにや。

不思議なる事ばかりなり此家は

窓もあらずに下に明るし」

櫻は歌ふ。

「疑へば限りなからむ此家を

吾は曲津の住家と思はず。

破家の表に乙女あらはれて

笑を湛へて吾を迎へし。

皇神の御言か、ぶり出でて行く

この旅立にさやる曲津なし」

斯く歌ひ居る折しも、秋風を先頭に四人の乙女は入り来り、盆に茶を汲みながら、目の上高く差上げ、破家に憩はせ給ふ客人に心ばかりの茶を奉る。

「これの茶は泉の山の高畑に
 榮えて甘き薬なりけり。
 それ故に普く人は泉茶を
 稱へて朝夕樂しみ飲むなり。
 これの茶を召上りませ長旅の
 疲れは頓に休まるべきを」

秋男は怪しみながら、

「何處もなくこの茶の香りは怪しけれ
 暫く時を待ちてすゝらむ」

秋風は稍顔色を變へながら、

「不思議なるここを宣らすよこれの茶は
 泉の茶にて人の生命よ」

秋男は答ふ。

「何もなく吾は生命の惜しさ故
 見知らぬ茶湯は飲みたくはなし」
 野分といふ乙女は涼しき聲にて、

「客人は吾等が真心疑ひて
 清き優しき心を受けずや。
 朝に夕に清めすまして作りたる
 これの茶の湯に毒のあるべき」

松は歌ふ。

「乙女等の清き心を受けぬには

吾あらねさも暫しを待たせよ。

あつき湯は吾は好まず舌やかむ

ぬるむを待ちて吾は飲むべし」

夕霧は後よりのび上りながら、

「乙女等の清き心を疑ひて

吾等の誠をうけ給はずや。

水奔草の茶湯を思ひて客人は

ためらひ給ふを思へば怨めし。

萩桔梗匂へる秋の山裾に

館造りて君等を待ちしよ。

吾こそは御樋代神に仕へたる

五乙女にて怪しきものならず」

竹は歌ふ。

「御樋代の神の乙女か知らねども

汝が面にあやしきふしあり。

折々に乙女の耳は動くなり

まさしく狐狸の化身を思ふ。

茶の色は次第々に變り行きて

墨の如くになりけらしな。

此茶こそ水奔草にてつくりたる

生命を奪ふ毒湯なるべし」

朝霧は歌ふ。

「斯くなれば最早詮なし吾々は

乙女も見ゆれど曲津神なり」

秋雨は歌ふ。

「客人に看破られたるその上は

最早詮なし覺悟召されよ。

破家も見ゆれど永遠の巖窟よ

最早逃れる道はあるまじ」

梅は聲もあらくしく歌ふ。

「吾もて汝が謀計を知りし故

これの巖窟を破らむこ來つる。

乙女子の姿を装ひ鬼婆の

命に従ひ謀る曲もの」

櫻は怒りながら、

「コリヤ曲津もうかうなれば是非もなし

吾言靈に飽くまで放らむ」

秋男は歌ふ。

「吾も亦曲津の巖窟に知りしゆる

殊更に此處に誘はれ入りぬ。

乙女子に見ゆるは何れも水奔鬼の

生命奪ふに待てる奴なり。

譏り婆に水奔草を飲まされて

汝等は鬼になりしものなり。

吾言靈心鎮めて聞けよかし

譏り婆アに怨み持たずや」

秋風は稍顔を曇らせて、

「客人の言葉は宜よ吾も亦

譏り婆アに謀られにけり。

この邊りは譏り婆アの繩張よ

吾等は彼に傾使さるゝもの。

玉の緒の生命をられし悔しさに

人を艱むる鬼はなりぬ。

此處に居る四人の乙女も悉く

吾等しき運命たざりし。

奥の間に譏り婆アは傷つきて

休らひ居りぬ亡ぼし給へ。

譏り婆をきたため給はゞ吾等亦

君に力を添へ奉るべし。

力強き鬼婆ながら昨夜より

不快なりて呻吟き居るなり』

松は歌ふ。

『吾君の生言靈に打出され

婆はいたでに惱むなるらむ。

面白し斯くも秘密を聞く上は

乙女に吾等は力を添へむ。

面白き事を聞くかな鬼婆は

これの館に呻吟き居るこは。

斯くならば力の限り聲かぎり

生言靈に攻め艱まさむ』

茲に秋男の一行五人と五柱の乙女、互に堅き握手を交はし、譏り婆の潜める居間を四方より取巻き、天地も破るゝばかりに大音聲を發し、

『一二三四五六七八九十

百千萬八千萬の神

此の館に潜みたる

譏り婆なる水奔鬼を

吾言靈にくまもなく

亡ぼし給へ惟神

吾言靈に力あれ

吾言靈に光あれ

アオウエイ

カコクケキ

ミ次々に七十五聲の言靈宣れば

さすがの水奔鬼も堪りかね

狭き室内を右往左往に荒れ狂ひ

悲鳴を擧げて又もや再び起上り

死物狂ひの形相凄じく

秋男に向つて飛びかゝるを

ものをも言はず拳を固め

婆の横面を打ちすゑくきためければ

さしもの婆も痛さに堪へ兼ねてや

窓の戸にはかに押開けて

忽ち巖窟内を飛出し

怪しき雲氣を吐きながら

雲を霞ミ大空さして

血煙の雨を降らせつゝ

跡白雲ミ逃げ行きぬ

あゝ惟神言靈の

巖の力ぞ畏けれ
 譏り婆アの水奔鬼は
 斯くして五人の乙女の精靈を
 醜の巖窟に残し置き
 第二の作戦に移らむと
 逃げ行きしこそ恐ろしき。

五乙女は満面に笑を湛へ、胸撫で下し、ウオ／＼と叫びつゝ、手の舞ひ足の踏む所を知らぬばかりなりける。

秋風は歌ふ。

『吾こそは泉ヶ丘に生れたる』

國津神等の娘なりけり。

四柱の乙女も同じ里の子よ

この鬼婆に謀られしもの。

水奔草の茶を飲まされて吾々は

水奔鬼はなりにつらしな。

客人に此茶をさゝげ吾と共に

力協すゝ勸めけるかな。

思へば春の初めなり

吾等五人の乙女等は

泉の里を立ち出でて

高たか光みつ山やまに詣までむこ
 進すすみ來きたれる折をもあれ
 旅たびの疲つかれに咽のど喉どかわき
 苦くるしむ折をしも森もり蔭かげの
 一ひとつの小こさき家いを見て
 吾われ等ら五ご人にんの乙おと女め等らは
 立たち寄より見みれば白しろ髪かみの
 一ひと人にんの婆ばさんが住すひ居ゐて
 先まづくく遊あそ茶ちやを召めがれよこ
 手て招まきしたる嬉うれしさに

暫しばく息いきを休やすめつゝ
 水みづ奔は草くさの茶ちやこ知しらず
 吾われ等らは一ひと度どに飲のみ乾ほしぬ
 俄たちに頭あたまは痛いたみ出でし
 手て足あし身み体てい腫はれ上あり
 身み動うごきならぬ状さま態たいを見みて
 婆ばはニツコこミ打うち笑わらひ
 吾われ計けい略りやくにかゝりしよ
 汝な乙おと女めの玉たまの緒いとの
 生い命ぢは最も早はや今け日ふかぎり

秋夜の月

葭原の國津神等の生命を
 残らず取りて幽界の
 真正の鬼こなせよかし
 吾の言葉に反きなば
 茨の鞭を振り上げて
 汝が全身打ち破り
 つらき目見せて呉れむずこ
 威しの言葉に怖ぢ恐れ
 彼が教ふるまゝにして
 悲しき月日を送り來ぬ

秋男の君は現世の
 人にしあれば言靈の
 力は強し吾々は
 精靈界にある身なれば
 其言靈に力あるべき
 言靈の光は出でず苦しみぬ
 心の中にて泣くばかり
 救はせ給へ水上の
 山に輝く巖ヶ根の
 御子さあれます秋男神の

秋夜の月

御前に願ひ奉る

五人乙女は鬼婆の

頃使に甘んじ仕へつゝ

強き身魂の來訪を

待ちに待ちたる甲斐ありて

恨みを晴らす時は來ぬ

あゝたのもしや心地よや

月見ヶ丘の聖場に

汝等が一行悉く

艱まし呉れむと計畫みしを

譏り婆アは逆しらに

生言靈に打出され

生命からく逃げ歸り

一間に呻吟き居たりしゆ

此時こそは幸ひと

五人乙女は牒し合せ

仇を打たむと思へども

素より乙女の力には

手向ふ由もなかりけり

かゝる處へ現身の

身体もたす汝一行
 來らせ給ふ嬉しさに
 毒ぞ知りつゝ水奔草の
 湯を勧めむこしたりけり
 必ず怒らせ給ふなかれ
 君を力こ思ふが故に
 吾等こ共に幽界に
 現はれまして鬼婆を
 討ち罰めつゝ靈界の
 禍ひ除くこ思へばなり

許させ給へ秋男神

御供の神の御前に

真心あらはし詫び奉る

外の乙女も同じ心の捨小舟

取りつく島もなかりしが

今日の吉き日の喜びに

蘇りけりあら尊

偏に感謝し奉る

是より君は言靈の

天の數歌うたひつゝ

火炎の山に進みませ
 譏り婆さんの第一に
 恐れて忌むは言靈よ
 吾は後より蔭ながら
 君の出で立ち送りつゝ
 一臂の力を添へ奉らむ
 進ませ給へ

こ言ひながら、五人の乙女は白煙となりて消え失せにけり。よくく見れば、森蔭の雑草の生
 ひ茂る中に一行は腰を下してうづくまり居つ。破家の蔭も巖窟も跡形なく、小鳥の囀り、虫の
 啼く音ばかりなりける。

秋男は歌ふ。

「不思議なる夢を見しより鬼婆の

惱める状態を覺らひにけり。

破家も巖窟も全く消え失せて

野邊吹く風の音さやかなり」

(昭和九・七・二七 舊六・一六 於關東別院南風閣 森良仁謹録)

此秋を關西地方の旅に立ちて

自然の力に今更おどろきぬ

第二章 火山 (二〇一五)

秋男の一行は毒草の生ひ茂る野を右に左に分けながら、夜を日に次いで前進し、三日目の黄昏時、漸く火山山の麓に辿り着きぬ。火山山は昔に名高き大火山にして、夜は大火光百里に亘り、時ありて焼石を降らし、人獸を害すること甚し。葭原の國津神等は一名地獄山と稱へて恐れてゐる。

この山はあらゆる猛獸毒蛇の棲處にして、譏り婆アの本據なり。

忍ヶ丘にて思はぬ不覺をこりたる笑ひ婆も、こゝに逃げ來り譏り婆の館に身をまかせて、靈身の傷を癒して居た。

秋男は國內に繁茂せる葭草や水奔草を、火山の火をこりて風に乗じ焼きはらひ、猛獸毒蛇を

悉く焼きつくさむと考へ、一先づこゝに進み來れるなりき。

黄昏時は云へ山頂より噴出する火光に晝の如く明く、草の根に潜む虫の影さへ明瞭に見ゆるばかりなり。

秋男は噴火の莊嚴なる様を見て、芝生に腰打ち下し歌ふ。

『火山山吐き出す焰の光りにて

これのあたりは夜なかりける。

濛々黒煙のぼる間を縫ひて

紅蓮の舌は天に冲せり。

この山の火種を取りて葭原の

國土の醜草焼き拂ふべし。

猛獸毒蛇數多棲むてふこの山を
 いかに登らむ噴火口まで。
 大空の月の光の褪するまで
 天に沖する火炎の焰よ。
 譏り婆の棲處に思へば肝向ふ
 心固めて山登りせむ。
 火の種の一つありせば葭原の
 國土を拓くはたやすかるべし。
 連日の旅に疲れて吾足は
 動かずなりぬ暫し休まむ

松は歌ふ。

「音に聞く火炎の山の噴煙は
 天津御空にこぼれかき思ふ。
 黒煙の中に紅蓮の舌見えて
 もの凄きかな火炎の山は。
 譏り婆の配下は如何程あるこても
 一つの火種に焼き亡ぼさむ。
 鬼婆の棲處を焼きて冬男君の
 仇を報うに思へば勇まし。
 秋の野の虫の聲々さわやかに

聞え來るなり地獄の山にも。
久方の御空の月は見えねごも

晝にまさりて明き國原。

譏り婆この高山の巖窟に

住むご思へば恐ろしき奴。

恐ろしく心汚くしぶごきは

婆アにまさるものなかるらむ。

婆ご云ふ名を聞くさへも何ごなく

いまはしき心湧き出でにけり。

殊更に譏り婆アの曲言葉

聞くさへ胸が悪くなるなり』

竹は歌ふ。

『火炎山吐き出す焔を眺むれば

吾勇ましく心ごきめく。

頂に驅け登りつゝ火の種を

取りて歸れば國土定まらむ。

如何にしても火炎の山の頂上を

極めずに吾歸るべしやは。

幾萬の水奔鬼の群來るごも

生言靈に追ひ退けむ。

武士の彌猛心はもえ立ちぬ

火炎の山の焔の如くに。

傷つきて呻吟きるるらむ此山の

醜の主の譏り婆アは。

言靈のいたく濁れる鬼婆の

譏り言葉は吾耳汚せり。

はてしなき大野ヶ原を涉り来て

今日は火炎の山にやすらふ。

吹く風もなまぬるくして心地悪し

水奔鬼の群窺へるにや。

水奔鬼浮塵子の如く寄するこも

大丈夫吾はびくこも動かず

大丈夫の彌猛心の切先に

寄せ来る鬼を突き伏せて見む。

いさましく天に冲する火焔にも

まさりて雄々しき吾みたまなり。

おもしろしあゝ勇ましゝ今よりは

譏り婆アの棲處を突かむ」

梅は歌ふ。

「水上の山を立ち出で日々なべて

火炎山の山に漸く來つるも。
 火炎山の噴煙見れば吾魂は
 天にのぼるが如く榮ゆる。
 晝の如明るき野邊の風景は
 火炎の山の火光のたまもの。
 夜されご火炎の山の灯に
 闇は來らじ戰によし。
 黒煙の中より赤き火の舌は
 北吹く風になびきるるかも』

櫻は歌ふ。

『この山に冬はなからむほのぐこ』

麓の風さへ暖かなれば。

木も草も見えわかぬ迄茂りたる

火炎の山の麓は凄し。

頂上の火種を一つ拾ひ來て

これの裾野を焼かむと思ふ。

おもしろき夕なりけり地は鳴り

木草はごよみ山は火を吐く。

目路の限り水奔草と葎草の

廣野は限なく明く見ゆめり』

に廻り殺し、てもさてもあはれなものだワイ。

イヒ、、、、オホ、、、、』

松は怒り心頭に達し、聲もあらくしく、

『おもしろし笑ひ婆アに譏り婆

只一討に亡ぼして見む。

吾敵はこゝに集りゐるに聞く

手間暇いらぬ今宵の戦ひ』

竹は歌ふ。

『水奔鬼いかに群がり攻め來こも

彌猛心に突き亡ぼさむ』

斯く云ふ折しも、不思議なるかな、火炎山の噴火はピタリ止まり、四邊は眞の闇、秋男の一行は進退維谷まり、大地にさつかみ坐し、双手をくんで暫し思案にくれて居たり。

暗がりの中より笑ひ婆は、顔の輪廓ハッキリ現れ來り、長き舌を出しながら秋男の前近く寄り來り、

『アハ、、、、イヒ、、、、』

もうかうなればこつちのもの、覺悟致して毒茶を飲め、さあ喜んで喰へ』

云ひながら、大いなる瓶より毒茶を秋男の面上に注ぎかくる。

秋男はたまりかねて兩手を以て面を覆ひ心の中にて、

『一二三四五六七八九十

百千萬千萬の神

守り給へ救ひ給へ』

と奏上するや、笑ひ婆の面は忽ち消え失せ、遙の方よりいやらしき笑ひ聲聞ゆるばかりなり。後方より譏り婆の聲、

『ギアハ、、、、ギユフ、、、、

腰ぬけ男郎の秋男の一行ごも、思ひ知つたか、譏り婆のお手並は此通り、斯くなる上は何程もがくも泣くも追ひつくまい、さてもく小氣味のよい事だワイ。ギユフ、、、、この婆は水奔鬼の中でも最も力のある御方ぞや。それに何ぞや、小さき人間の身ごして、譏り婆を征伐するこは片腹痛い。もうかくなる上はこつちの自由、てもさてもあはれな腰ぬけ男郎だな』

秋男は無念やる方なく、生命を的に聲する方に向つて拳を固め飛びつく途端、闇の落し穴に

こつこばかり落ち込みにける。

譏り婆は又もや大聲にて、

『ギアハ、、、、てもさても小氣味よし。秋男の男郎はこの方の計略にかゝり、もろくも生命を落しよつた。それでも俺の輩下が一人殖えたご申すもの、後の四人の餓鬼ごもはさアごう致す、降参致して俺の部下ごなるかごうだ、返答いたせ、ギアハ、、、、よもや手向ひよう致す力はあるまい』

松、竹、梅、櫻の四人は、一齊に譏り婆の聲する方へ突進する途端、あはれや一度に闇の奈落に墜落し、惜ら現身の生命を失ひける。

火炎の山は再び噴煙を吐き出し、火光天に沖し、さも物凄き光景なりける。

秋男の一行は闇の落し穴に墜落し、果敢なくも現身の生命を失ひけるが、その精霊は不老不

死にしてこゝに復活し、五人一度に首を鳩め、婆の奸策にかゝりしこゝを恨み居る。

秋男はかすかに歌ふ。

「思ひきや火炎の山に辿り来て

かゝる歎きに今遭はむこは。

斯くなれば吾等も同じ水奔鬼の

群に入りしか思へばくやしき。

水奔鬼にたこへなるこも吾心

彼の鬼婆をきたためで置くべき。

汝も亦吾も同じく鬼婆に

玉の生命を奪はれけるよ。

この上は五人力を一つにし

二人の婆を打ち亡ぼさばや」

松は歌ふ。

「吾君の仰せ畏しこの恨み

吾等はむくはで止むべきならず。

悪神の謀計の畏に陥りて

果敢なくなりし吾はくやしも」

竹は歌ふ。

「地獄山麓の穴に陥りて

玉の生命を捨てにけらしな。

身体はよし失するも精霊の

生命は長し恨みをむくいむ。

武士の彌猛心も斯くならば

暫しは詮すべなからむと思ふ」

梅は歌ふ。

「力よわきこゝを宣らすな精霊こ

云へごも吾等は雄々しき大丈夫。

大丈夫の堅き心はよしやよし

生命死すもひるまざるべし。

水上の山にあれます御父は

歎かせ給はむ二人をこられて。

吾父も母も歎かむ火炎山の

鬼に生命をこられしき聞きて。

さりながら吾等五人の言靈に

醜の鬼婆平げて見む」

櫻は歌ふ。

「思はざる不覺を取りて主従は

あたら生命を失ひにけり。

さりながら吾精霊はかくの如

生きてありせば恐るゝに足らず。

ごこ迄も婆アの生命取らざれば

大丈夫吾等の意氣地は立たず。

八千尋の深き穴底に落されて

生命亡せしし思へば恨めし。

この恨みやがてはらさむ笑ひ婆

譏り婆アの首引きぬきて』

斯く主従五人は、今更の如くあたらし生命を奪はれたるを怒り且つ歎き、仇を報すべきを語り合ひつゝ、千尋の深き穴の底に佇んで居る。

時こそあれ、いづくともなく、いやらしき笑ひ婆の笑ひ聲、譏り婆の破鐘の聲、物凄く響き来る。

(昭和九・七・二八 舊六・一七 於關東別院南風閣 谷前清子謹録)

豊岡の神聖會支部の開式に

出演しつゝ、同胞を思ふ

鳥取の神聖本部の開式の

盛大なりしも時の力よ

吾は今米子市内に宿泊し

明日の言靈戦の準備す

第二章 夜見還 (二〇一六)

四邊黯黩へんあんたんとして聲もなく、天低う妖雲垂れ下りて一陣の風もなし。蒸し暑き事釜中を行くが如く、陰鬱いんうつの空氣漲り、全身脂汗にじみ、形容し難き苦しき中を、葭草よしぐさ水奔草すいほんそうの生ひ茂る荒野ケ原を進みゆく一人の男ありけり。

『あゝいぶかしやく』

水上山を立ち出でて

幾夜を重ねる草枕

怪しき事の數々を

目撃しつゝ黄昏に

火炎の山の麓まで
進み來れる折もあれ
天に沖する大噴火
忽ちこゝまり暗黒の
幕は四邊を包むよこ
見るまもあらず譏り婆
笑ひ婆アの水奔鬼
闇の幕をば距てつゝ
怪しき事の數々に
笑ひ罵るにくらしさ

われ等は腹に据ゑかねて
 闇に向つてつき込めば
 思ひがけなや八千尋の
 地底の穴に陥りて
 苦しみもだゆる折もあれ
 續いて落ち込む松、竹、梅
 櫻の四人も現世の
 生命は空しくなりにけり
 此處にも怪しき婆の聲
 いぶかしさよご思ふ折

わが言靈はいち早く
 この場を去りしご思ひきや
 かゝる怪しき大野原
 悲しく淋しく一人ゆく
 あゝ惟神々々
 神の此世にましまさば
 わが行く先を明らかに
 天地の妖氣を吹き拂ひ
 示させ給へご願ぎまつる
 天地静かに風死して

わが身体からだの全部ぜんぶより
 熱湯あつたぎの汗あせはにじみ出いで
 痒かゆさ苦くるしさ堪たへがたし
 こゝは地獄ぢごくか八衢やぐちか
 合點あての行ゆかぬ事ことばかり
 正ただしく幽冥うゑいの道みちならば
 わが弟おとうとに出會あふならむ
 冬男ふゆおとこ戀こひしや、なつかしや
 精靈まこととなりて生いくるなら
 われの悲かなしき心根こころねを

思おもひ計はかりりて來きれかし
 汝ななの仇かたを討うたむまで
 惡魔あくまの婆ばに謀はからはれ
 尊たうとき生命いのちを捨すてにけり
 思おもへばく憎にくらしや
 譏あざわらり婆ばアに笑わらひ婆ば
 たゞへ幽界うゑかいなればきて
 これの惡魔あくまを殲滅せんめつし
 精靈界まことがいを悉ことごとくく
 清きよめ澄すまして天國てんごくの

貴の門戸こなさしめむ
あゝ惟神々々

恩頼を願ぎまつる

高光山は遠くこも

火炎の山はさかしこも

如何でひるまむ靈魂の

生命のあらむ其限り

登らなおかぬ大丈夫の

彌猛心をみそなはし

天地に神のいますなら

わが願ぎ言を詳細に

聞し召さへこ願ぎまつる』

斯くうたひつゝ前進すれば、血の如き色を爲せる濁水の流るゝ大川につゞ行き當りたり。秋男は如何にしてこの濁水を渡らむかこ、岸邊に佇み、頭を傾け、腕を組み、太き溜息吐きながら、微に歌ふ。

『幽界の淋しき道をたごり来て

血潮流るゝ川邊に來りぬ。

滔々こ流るゝ水は悉く

悪臭交りて胸ふさがりぬ。

汚れたる此の血の川を渡らむこ

われは思はじ如何になるとも。
人の身の宿世思へば悲しけれ

わが たつ 涙川 流れつ

斯く歌ふ折しも、傍の葭草の枯葉をそよがせながら、瘦せこけた老婆、藜の杖をつき海老腰になりながら、秋男の前に現はれ來り、全身を見上げ見下し、「ゲラ〜」と打ち笑ひ、

「この婆はそちが生命を奪ひたる

譏り婆アの分けみたまぞや。

よくもまあ迷ひ來しよなこの川は

膿血ミ痰の集りなるぞや」

秋男は歌ふ。

「思ひきや紫微天界の眞秀良場の

この葭草に地獄ありきは。

よしやよし地獄の旅を續くるとも

われは進まむ 高光山へ」

婆アは勝をしやくりながら、

「この婆は瘡ミ申す水奔鬼

此處に來る奴なやめて樂しむ。

來る奴は一人も残らずわが爲めに

瘡を病みて死ぬる嬉しさ。

其方は精靈なれどこの婆の

夜見遊

恵みによりて瘡をふるへよ』

秋男は冷然として、

『かくなればわれは恐れじ瘡婆の

霊の生命を伐り放るべし』

婆アはこの歌に眼を釣り上げ、口を尖らし、秋男が側近く寄り添ひ、氷の如き冷き手にて、

秋男の左右の手をグツと握り、憎々しげに、

『こりや秋男の餓鬼、俺を何方に心得てゐるか。血の川の主、水奔鬼の瘡婆アこいふは

此方の事だ、さア、これからは其方の霊の生命をこり、血の川に水葬してやらう。有難く

思へ』

秋男は、

『何をするか氷の如き瘦腕に

われの両手を離さぬ鬼婆。

鬼婆の醜き姿一目見て

われは吐き氣を催しにけり』

婆アは、

『何をこしやくな、俺の顔を見て吐氣を催すこはよくも云へたものだ。やい糞袋、痰壺、

小便のタンク奴、左様な太平樂を聞く鬼さんぢやないぞ。サアこれから其方の皮衣をは

ぎ、腕をぬき、骨を引き切り、川瀬の亂杭に使つてやらうぞ。それがせめても貴様にこつ

ての幸ひ、罪滅しこいふものだ。ギャハ、ハ、あのまあむづかしい、青黒い、悲しさ

うな顔わいのう、イヒ、、、』

秋男は進退これ谷まりて如何にもする術なく、途方にくれたる折もあれ、松、竹、梅、櫻四人の精靈は此場に現れ來り、秋男が瘡婆アに苦しめられる体を見て、驚きながらバラ／＼に婆アを取りかこみ、

『はて不思議譏り婆アによく似たる

こゝにも鬼が現れしぞや。

よく見れば秋男の君の手をつかみ

苦しめ居るか悪たれ婆ア奴』

秋男は細き聲にて顔をしかめながら、

『この婆に苦しめられてゐるどころ

汝等四人はわれを救へよ』

松は應へて、

『若君の悩みを見つゝ如何にして

われ等四人もだし居るべき。

わが力あらむ限りをこの婆の

頭上にくはへて打ち据ゑて見む。

竹よ梅よ櫻よ來れ此の婆を

只一息に打ちなやまさむ』

四人は一度に拳を固め、婆アの面部をめぐけて打ち据ゆれば、如何はしけむ、婆アはビクミもせず、四人の拳よりは血潮タラ／＼に流れ出で、痛き事堪へ難し。瘡婆は冷笑し、

『ギャハ、、、この方を何方様ぞ心得てゐるか。岩より固き水奔草の司、この川の邊に

棲處を固め、先に廻つて汝等が迷ひ来るを待つてゐた。笑ひ婆アや譏り婆アの一味の者だよ。もうかうなる上は覺悟を致せ。往生致さねば此上辛き目見せてくれむ。さあ返答はさうぢや。イヒ、、、てもさても心地よやな』

五人はこゝに進退維谷まり、如何はせむと案じわづらふ折もあれ、忽ち空をこよもして進み來る一炷の火團、轟然たる響きもこの川の邊に落下したり。この出來事に、癡婆アの影は雲霧に消えて跡形もなく、よくく見れば、依然として火炎山の麓の譏り婆アが造り置きたる陷穽の底に主従五人横たはり居たるなりけり。

秋男は歌ふ。

『いぶかしや悪魔の良に陥りて
死せしと思ひしは過なりしよ。』

身体の生命ありせばこれよりは

この陷穽を傳ひ上らむ』

松は歌ふ。

『有難し神の恵の幸はひに

われは罷らずありにけらしな。

常磐木の松の心をはげまして

冬男の君の仇を酬はむ。

玉の緒の生命失せしと思ひしを

神の恵みに生きてありけり』

竹は歌ふ。

夜見還

「大丈夫われ生きてありけり穴の底を

傳ひ上りて再び活動かむ。

玉の緒の生きの生命のある限り

災をなす鬼をやらはむ。

飽くまでも初心を貫徹なされば

益荒猛男の胸の晴るべき」

梅は歌ふ。

「兎も角も蘇りたる嬉しさに

われは言葉も絶え果てにけり」

櫻は歌ふ。

「火炎山麓にすめる譏り婆アの

たくみ果敢なく破れけるかな。

曲鬼は闇に陥奔作り居て

わが一行をなやまさむせり。

男の子われ生きの生命の續く限り

神國の爲めに曲亡ぼさむ」

秋男は歌ふ。

「いざさらば生言靈を宣りながら

上りゆかなむこの深穴を。

一二三四五六七八九十

夜見遣

百千萬八百萬の神

守らせ給へ』

こ、宣り終るや、地底は次第にふくれ上り、以前の樹蔭にたちかへりける。

秋男は歌ふ。

『天地の神の恵みの深ければ

元津場所^{もとつばしよ}に生きかへりたり。

これからは五人心^{いんこころ}を協せつゝ、

曲^{まが}の砦^{とりで}に攻めて上らむ』

(昭和九・七・二八 舊六・一七 於關東別院南風閣林 彌生謹録)

第三章 樹下の囁き (二〇一七)

蘇^{よみがへ}りたる五人の一行は、火炎山の籠^{かご}り樹^きの蔭^{かげ}に息^{いき}を休^{やす}ませながら、邊^{あた}りの風光^{ふうこう}を見や
りつゝ、朝明^{あさめ}けの空^{そら}に秋男^{あきお}は歌^{うた}ふ。

『秋^{あき}の日^ひの旅^{たび}を重ねて今^{いま}此處^{こゝ}に

あしたの露^{つゆ}の光^{ひかり}れるを見つ。

いろくの鬼婆^{おにばあ}たちにさやられて

わが魂^{たましひ}の雄猛^{おとたけ}びやまずも。

うるはしき朝^{あさ}の眺^{なが}めに吾魂^{わがたま}は

よみがへりつゝ、雄猛^{おとたけ}びするも。

樹下の囁き

鬼婆の醜のたくみも何かあらむ

昇る朝日に消え失せぬれば。

曲津見は光を恐れ闇の夜を

たのみて伊猛るはあはれなるかな。

赫々々輝き給ふ朝津日の

光に亡びぬ水奔鬼の群。

木々の梢露を浴びつゝ瑠璃光の

光保てり朝日のかげに。

黒雲を起してわれを艱めてし

譏り婆アのかげいづらなる。

髪の毛もよだつばかりの嫌らしさ

譏り聲出す醜の鬼婆。

心地よき秋のあしたの山風を

浴みつゝ、樂し曲津の棲處も。

さやくに千花百花吹きて行く

風の音清くわが魂榮ゆる。

白萩の所せきまで咲き匂ふ

此山もごに不思議や鬼棲む。

澄みきらふ空の色かも山肌の

草木の色は青みだちたり。

攻め来る醜の曲津を悉く

生言靈に言向け和さむ。

大空に黒雲起し荒びたる

譏り婆アのはてあはれなる。

高くこも登り了せむ山の上の

火種をこりて國土を定めむ。

血の川の側に立ちたる夢を見て

鬼のたくみの深きを悟りぬ。

月も日も御空に清く照り渡る

今朝の休らひ清しきろかも。

照り渡る天津日のかげ浴びながら

われは進まむ頂さして。

鳥の聲清しくなりて山の袖

吹く秋風は涼しかりけり。

何事も神の御旨に従ひて

登らむ山に曲津のあるべき。

西を吹く風にあふられ山袖の

尾花は地に靡き伏したり。

奴婆玉の間に伊猛る鬼婆を

生言靈の劔に放らむ』

松は歌ふ。

「野に山に咲く白萩の花見れば

鬼の心か風にみだるゝ。

優しかる姿ながらも白萩の

花の亂れを見るは憂れたし。

吹く風にもろく散りゆく白萩の

花にも似たる譏り婆かも。

秋山の草木はいづれも紅葉して

北吹く風に打ちふるふなり。

果敢なきは風に散り行く病葉の

すがたに似たる鬼婆なるかも。

穂薄は何を招くか力弱く

秋吹く風に倒されにつゝ」

竹は歌ふ。

「鬼婆の館に會ひし五人乙女の

行方はいづこ聞かまほしけれ。

精靈の身にしあれどもわが旅路

守るまこと云ひし事は忘れじ。

火炎山焔は天に沖すれぎ

此山裾は秋風そよぐ。

樹下の囁き

時々は唸りをたて、焼石を

四方に降らせる火炎の山かな。

火の種の手に入るまでは此山を

われ等五人は離れじと思ふ。

此山の頂雲に包まれぬ

悪獣毒蛇の集ひ居るにや」

梅は歌ふ。

「女郎花風にゆらげるさま見れば

貴の乙女のよそほひ思ふ。

萩桔梗紫匂ふ山裾に

朝日をあびて憩ふ樂しき。

来てみれば火炎の山の頂は

いよ／＼遙けくいよ／＼高し。

もろ／＼の曲神集ふ此山は

心して行け言靈宣りつゝ」

櫻は歌ふ。

「鬼婆の繩張さいふこの山は

怪しき事のみ次々起るも。

さはあれど誠心に進みなば

如何なる艱みも安くのぼらむ。

樹下の囁き

火炎山火種の一つ持つならば

此國原は安けかるべし。

はろぐみ水上の山を立ち出でて

今日は魔神の軍に向ふも。

笑ひ婆こ譏り婆アの上へ

瘡婆アの夢を見しかな。

婆こいふ名を聞くさへも忌はしく

汚らはしくも思はれにける」

秋男は歌ふ。

「大丈夫の彌猛心を引き立て、

いざや登らむ火炎の山頂」

こ歌ひながら、松、竹を先頭に、梅、櫻を殿とし、壁立つ羊腸の坂道を、一歩々々刻みつゝ、登り行く。

秋男は歌ふ。

「ウントコドツコイ、ドツコイシヨ

火炎の山はさかしこも

悪魔の猛びは強くこも

如何で恐れむ大丈夫の

固き心を發揮して

此急坂を登るなり

樹下の驛き

尾花は靡き百花は
 わが行く足の右左
 清く匂ひて虫の音も
 いこさや／＼に聞ゆなり
 あゝ勇ましや勇ましや
 天地開けし始めより
 例もあらぬ山登り
 魍魎毒蛇は潜むこも
 生言靈の劔もて
 斬り放らひつ葭原の

神國の基礎を固むべく
 山の尾の上の火口まで
 進まにやおかぬ大和魂
 進めよ進め、いざ進め
 天津御空はいや高し
 地上を伏して眺むれば
 黄金の野邊は天津日の
 光りを浴びてきら／＼と
 目路の限りを光るなり
 わが行く道は遠けれご

いつかは登らむ火炎山
 その頂に輝ける
 火種を一つ戴きて
 世人を普く救ふべし
 あゝ惟神々々
 わが一行に幸あれや
 天津神たち國津神
 百の神たち聞し召せ
 あゝ惟神々々
 神のまにゝ進み行く

ウントコドツコイ、ドツコイシヨ

「歌ひながら秋男は急坂をものこもせず、雄々しく登り行く。
 松は歌ふ。」

「登り行けば頂ますゝ遠く見えて
 心もこなき火炎の山かも。
 不思議なる山にもあるか行けぞく
 はてしも知らぬ高き峰なり。
 悪神の妨げなせるか吾足は
 重たくなりて開きかねつゝ。
 兎も角も此處に息をば休めつゝ」

樹下の囁き

登り行かむか秋男若君

云ひつゝ、地上より一尺ばかり頭を突き出し覗ける岩にさつかさ腰を掛け、ハア／＼息を
はづませ居る。一行はこれに倣ひて、萱草の上につきか腰を下し、荒き鼻息を止めむして
居る。

秋男は歌ふ。

「行けさ／＼果しも知らぬ此山は

不思議なるかな追々遠のく。

魔の山か地獄の山か知らねども

次第に遠のくいぶかしの山。

曲神のまたもや良にかゝりしか

心もこなきこの山登り」

竹は歌ふ。

「若君の仰せ宜なり此山は

譏り婆アの棲處なりせば。

怪しきは此山登りいつまでも

同じ所を行きつ戻りつ。

まなかひは眩みたるらし村肝の

心焦てさ道渉らず」

梅は歌ふ。

「わが眼こそすり／＼てよく見れば

樹下の囁き

わが身の位置は少しも變らず。
籠り樹のかげに佇み足ばかり

われらは動かし居たりけむかも」

櫻は歌ふ。

「如何にしてわれ登らむと思へども

曲津の猛びの妨げ強し。

皇神のわれにたまひし數歌を

うたひくゝて登りたく思ふ。

數歌にうたれて逃げし鬼婆よ

これに勝りし武器はあらじな」

秋男は歌ふ。

「さもあらむ吾はこれより言靈の

天の數歌うたひ登らむ。

一二三四五六七八九十百千萬

八千萬の神守らせ給へ。

言靈の嚴の力に助けられ

登り了せむ山の頂」

斯く歌ふ折しも、籠り樹の梢の方より、

「アツハ、、、

イツヒ、、、

樹下の囁き

ウツフ、、、

うつけ者、思ひ知りたか、吾こそは忍ヶ丘に年古く棲みし水奔鬼の司、笑ひ婆アぞや、よくものめく、吾棲處へ迷うてうせたな。もう斯くなればこつちのもの、てもさてもいぢらしいものだワイ。

イツヒ、、、

嚴めしい姿致して、偉さうに鬼を征服するなごこは、をこがましや、あた阿呆らしや、こても叶はずきつぱりこ降參致すか、首でも吊つて往生するか、返答如何に。

ウツフ、、、

かねてわがたくみ置きたる計略の

良にかゝりし愚者かな。

さてもく憐れな者よ此餓鬼は

火炎の山の露を消ゆべし。

玉の緒の生命を靈魂の生命をば

共に碎きて苦しめ惱めむ。

今日の如く心地よき日はなかるべし

冬男の餓鬼の恨み晴らせば』

秋男は歌ふ。

『ごこまでもわれに仇なす曲津見を

征討めでやむべき大丈夫われは。

かくならば一歩も退かじ巖ヶ根の

樹下の囁き

神の司の御子にしあれば。
祖先の恥を思へば一歩も

曲津の棲處は退かざらむ。

曲神の司に云へる笑ひ婆

譏り婆アを征討めて止まむ』

樹上より怪しき聲再び聞えて、

「ギャツハ、、、」

此方は月見ヶ丘にて、其方たちを惱めし水奔鬼の司、笑ひ婆アが妹の善事曲事一切を譏り婆アの曲鬼様だ。しつかり三耳を凌へて聞け。

もうかうなる上は通しはせぬ、覺悟極めて婆アが軍門に降れ。いづれ保てぬ此世の生命、

綺麗さつぱり此方に奉り、わが幕下になつて忠實に悪を働け。それに背くよあれば止むを得ず、汝が身体靈魂を捻り潰し、踏み碎き、無限の憂目を見せて呉れむ、ワツハ、、、
、、ワツハ、、、』

と碎ける如き婆アの聲の嫌らしさ、身体一面に粟を生ずるばかりなりける。

秋男は不審の念晴れやらず、ふと大空を仰げば、今まで煌々たる天津日の光は跡形もなく満天黒雲塞がり、陰鬱の氣四方を鎖し、次々怪しき物音高まり来る。

一行五人はこゝぞ一生懸命に、力限りに天の數歌を奏上しつゝありける。

曲神のまたもや良に陥りて

あはれ五人は闇に包まる。

悪神の計略は深し七重八重

樹下の囁き

黒雲の幕包みて攻め來る。
 急坂を登る心地し樹のかげの
 同じ所にうろつき居たりし。

(昭和九・七・二八 舊六・一七 於關東別院南風閣 白石真子謹錄)

常暗の世々の光と日月の

教を四方に傳へ行くなり

第四章 報 哭 婆 (二〇一八)

火炎山の頂上に、虎、熊、獅子、狼、豹、大蛇等の猛獸が、火口の周圍に棲息し、何者にも火種を盗まれざるやうに、日夜固く守つてゐる。若し此火種を奪はれ、葭原の大原野に放たれることあらば、それこそ一大事、猛獸毒蛇は忽ち焼き殺され、全滅の憂目にあはむことを恐れ、猛獸毒蛇の王は協議の上、當番を選びて噴火口の周圍を固く守り居たりける。秋男は此火種を奪ひ取り、山村原野に放火して、一齊に葭原全帯の悪魔の巢窟を焼き盡さむと計畫したりける。然るに猛獸毒蛇どもの前衛を務むる譏り婆の水奔鬼は、力限りにこれを阻止すれども、動もすれば秋男が登山するの恐れあり、如何にもして、これを妨げむと、種々様々の魔術をつくし、暫時の間を闇の幕に包みおきたるなり。山上の火口の周圍には、猛獸の王首を鳩めて山麓

より響き来る言霊の水火に戦きながら、如何にもして火取の敵を防がむやこ、協議の真最中のころへ、すたくし息をはづませ登り来りしは、笑ひ婆ア、譏り婆アの二鬼である。虎王は二鬼を見るより慌しく聲をかけ、

『山裾に言霊ひゞくは何者ぞ』

つぶさにかたれ二つの婆ごも』

熊の王は、

『汝等は何をためらふか一刻も』

早くまここを吾等に傳へよ』

笑ひ婆は、

『アハ、、、イヒ、、、』

いけすかぬ餓鬼ごも五つあらはれて

この山の火を取らむとするも。

たましひのあらむ限りの力もて

吾は今までふせざるたりき。

わが力最早つきなむ願はくば

君の力を吾にあたへよ』

譏り婆は歌ふ。

『イヒ、、、いらぬ世話やかす餓鬼ごもが』

あらはれ火炎の山にのぼらむ。

われも亦力かぎりに防げごも

敵は言靈の武器を持つなり。

斯くならば君の力をからむより

外に手だてはなしと思へり』

虎王は歌ふ。

『その方は小刀細工いたす故に

もろくも敵にくじかれにけむ。

言靈の武器おそるゝに足らざらむ

魔術をつくして向ひ戦へ。

魔心のひるまずあれば言靈の

劔もいかで恐るべきかは』

狼の王は歌ふ。

『笑ひ婆ア譏り婆アの氣の弱さ

きゝて狼あきれ果てたり。

闇の幕汝に與へあるからは

彼がまなこをくらませ亡ぼせ』

笑ひ婆、

『アハ、、笑ひ婆アは根かぎり

力の限り戦ひしはや。

迷はせし穴に落せし言靈の

劔に彼はひるまざりける。

名に高き笑ひ婆アのたくらみも
 今は全くやぶれはてたる。
 この上は君が力を借りるより
 わが生くる道更になからむ』

狼の王、

『氣のきかぬ二人婆アよ狼は

今日より汝に暇つかはす。

くら闇の常夜の幕を持ちながら

へこたれ悩みし腰抜けなるかな』

獅子王は歌ふ。

『狼の君よしばらく待てよかし

婆アの魔言のふかきをさこりて。

斯くならばわれ等一度に魔力を

あはせて敵を亡ぼさむかな。

熊も来よ虎狼も從へよ

山を降りて敵に向はむ。

言靈の劔の光するごくも

われ等は牙もて咬み殺すべし』

斯く山上の悪魔等は協議を凝らしてゐる。麓の樹蔭に夢よりさめたる如き秋男一行は、山頂の噴火するさまを眺めながら、

「あゝ吾は譏り婆アにはかられて

樹かげに夢をみてるたりけむ。

如何ならむ艱みにあふもひるむまじ

山の尾の上の火をさらざれば。

火の種をさられむこころをおそれみて

猛獸毒蛇は守りゐるこ言ふ。

こもかくも捨身となりて堂々こ

曲津の岩に押し寄せゆかむ。

火の種の一つありせば山に野に

ひそむ悪魔の棲處を焼かむ」

松は歌ふ。

「情なや譏り婆アのたくらみに

大丈夫吾はあざむかれける。

斯くならば最早覺悟し鬼婆の

醜のたくみを退けゆかむ。

國の爲めに心をいらつわが側に

無心の結梗は安く匂へり。

天津空仰ぎて見れば天津日は

うす雲の中に輝き給へり」

竹は歌ふ。

「笑ひ婆譏り婆アのさまたげを

うちはらひつゝ登りゆくべし。

にくらしや冬男の君の御生命

こりたる婆アを征討めでおくべき。

この婆は曲津神等のさきばしりを

つこむる醜の曲ものなるらむ」

梅は歌ふ。

「大空はやゝ曇れども路の邊の

千草は花をかざして匂へり。

一々天にはかに曇り太き雨

降り出しにけり曲のたくみか」

斯く歌ふ折しも、山上の猛獸連は秋男一行の登山を喰ひ止めむとして、雲を呼び、風を起し

大雨を降らし、雷を使い、忽ち天地は暗澹として修羅道を現出したりける。

梅はこの光景を眺めて、

「頂にすまへる猛獸毒蛇の

すさびなるらむ雨風しげし。

雷は高く轟き風荒れて

山に登らむ手だてさへなき。

斯くならば曲の力の弱るまで

待ちて登らむ火炎の山頂」

秋男は歌ふ。

『又してもござかしきかな曲神は

黒雲おこし雨を降らすも。

曲神の醜の材料つくるまで

心静かに樹かげに待たむ』

雷鳴轟き稻妻ひらめき、山風強く吹き荒び、大雨沛然として降りしきり、樹下の宿りも雨洩りの爲に、皮衣もびしよ濡れになり、大いに苦しみたれど、五人の大丈夫は少しもひるまず、天の敷歌を奏上して時の過ぐるを待ち居たり。天地の闇を縫うてひらめく稻妻の間より、鬼婆の影ちらり／＼と現はる、さま、一入いやらし。樹の枝高く怪しき聲又もや聞え來る。

『ギャハ、、、獅子王様の力を借り、あらはれ來りし鬼婆ぞや。この笑ひ婆は以前事

變り、獅子王、熊王、虎王、狼王様方々の御力を拜借致してこれに現はれしものなれば最早、汝等の言靈をやらにひるむべき。さあ、これよりは汝等の返答次第にて、骨を碎き肉を削ぎ、血をしぼり、獅子王様のお食事に奉らむ。てもさても面白や勇ましや、イヒ、、、ウフ、、、イヒ、、、オホ、、、臆病者、この方の言葉を聞いて胸ふるひ致してゐるが、さても／＼いぢらしい者だワイ。ギャハ、、、此方は汝が恐るゝ、譏り婆ぞや。今日こそは汝等が運の盡き、獅子王様の力に依つて生命を奪はるべし。じたばたしても、もう敵ふまい。さあ動くなら動いてみよ。神變不思議の金縛りの術にかけおきたれば最早びくも動けまい。さても／＼心地よやな、ギャフ、、、ヒワードロ／＼、、、この方は水奔鬼の譏り婆アの幽霊ぞや。いやらしくはないか、いや、おそろしくはないかウフ、、、』

こ、幾度もなく同じこのみ繰返す鬼婆の言葉に、秋男は膽力を据ゑ、再び天地を拜し、生言靈を奏上するや、さしも激しかりし雷鳴電光一時に止まり、山風の荒びも、降る雨も、びたりこ止まりて、天地晴明、空に一點の雲霧もなく、地上は錦の筵を敷き並べたる如く、日月輝き渡り、再び元の天地の光景にかへりたるこそ不思議なれ。

(昭和九・七・二八 舊六・一七 於關東別院南風閣内崎照代謹録)

大神の貴の守りの深くして

吾行く道に曲の影なし

第五章 憤 (二〇一九) 死

秋男は以前の樹蔭に立ちて此處を先途に生言靈を宣る。

「高天原に現れませる

主の大神の神言もて

ア聲の言靈に生れませる

瑞の御靈の神柱

顯津男の神國々を

經巡り給ひて言靈の

水火を凝らして神を生み

憤 死

秋夜の月

國土を生ませる功績に
大海原も國土も
何かに委曲に生りましぬ
中にも廣き萬里の海
其真中に浮びたる
島々數多ある中に
別けて廣げき葭の島
葭原國は主の神の
貴の御水火に生るものぞ
山河草木も人草も

鳥獸のはしまでも

皆主の神の御水火に
生り出で給ひし御賜物
この食國に安々く
生を享けたる現世の
人のみならず幽世の
身魂こころ御恵みを
蒙らぬもの無かるべし
主の大神の遣はせし
朝霧比女の神言もちて

慎死

秋夜の月

吾等の父の巖ヶ根は
 水上山の聖場に
 貴の館を構へまし
 豫讃の國原悉く
 治し食すべき司なり
 吾は巖ヶ根第三子
 秋男と名づくる國津神よ
 尾の上に潜む獅子熊も
 虎狼も毒蛇も
 笑ひ婆アも悉く

父の命の配下ぞや
 吾言靈にもしやもし
 敵對ひ來る事あらば
 此世は愚か幽世の
 何處の果にも棲處をば
 絶對的に許すまじ
 汝曲津見曲鬼よ
 吾打出す言靈に
 耳を傾け目を開き
 心の雲霧打ち拂ひ

憤死

誠の心に立歸り
 神に従ひ奉るべし
 あゝ惟神々々
 瑞の御靈の大神の
 大御心を心こし
 茲に秋男は慎みて
 汝等が爲に宣り傳ふ
 一二三四五六七八九十
 百千萬八千萬の神
 守り給へ幸へ給へ

吾言靈に力あれ
 吾言靈に光あれ

こ聲も爽かに歌ふ。曲神もこの言靈に心とらきたるか、山腹の女郎花を揺がせて香ばしき風心にけり。
 地よく吹き通り、梢に嘯る迦陵頻伽の聲一入清しく、小草にすだく虫の音もいこ美はしく嘯きにける。

松は歌ふ。

『ありがたし秋男の君の言靈に
 天地開く心地するなり。
 掛巻も畏し嚴の言靈に
 吾魂もいきり立つなり。』

榮えある君の言靈清しけれ
曲津も必ず服従ひ來らむ』

竹は歌ふ。

『大空を包みし黒雲散り失せて』

月日は空に澄み渡りけり。

吾君の宣らす言靈幸はひて

葭原を吹く風は凧ざたり。

何もなく心清しくなりにきて

吾行先の幸を思ふも。

音に聞く火炎の山は峻しけれき

言靈宣れば安く登れむ。

頂に猛き獸が屯して

火種を守るも吾は聞きけり。

笑ひ婆、譏り婆アのいたづらも

野邊吹く風さなりにけるかな。

先の夜に月見ヶ丘に荒みたる

婆アはあはれ影隠しける』

梅は歌ふ。

『高らかに宣らせる嚴の言靈に』

天地四方の雲霧晴れ行く。

千早振る神の伊吹の言靈は

此世を洗ふ力なりけり。

世の中に生言靈をおいて外に

尊きものはあらじと思ふ。

山に野に平和の風の吹き起り

花咲き實るも言靈の幸。

斯くまでも尊き君ご知らざりき

秋男の神の生ける言靈よ」

櫻は歌ふ。

「種々の艱みに遇ひて吾々は

生言靈の力覺りぬ。

幾萬の敵現はるも恐れざらむ

君が言靈清く響けば。

アオウエイ五大父音の功績に

此天地は生り出でしに聞く。

今こなりて神の力の尊さを

覺りけるかな愚なる吾は。

草枕旅を重ねて山裾の

茂樹の蔭に道を覺りぬ。

水奔鬼如何にたくむも何かあらむ

言靈 劍 帶ぶる 吾身は。
吾帶ぶる 言靈 劍は 錆びぬれき

君は 鋭き 力持たせり」

茲に秋男は意を決し、生言靈の功の尊さに力を得、自ら先頭に立ちて、壁立つ山肌を右に左に傳ひながら歌ひつゝ、登り行く。

「火炎の山は峻しきも

百草千草吾行く手

うづめ塞ぎて妨ぐる

此山路も何かあらむ

生言靈の劍もて

右に左に斬りなびけ
行く手を清めて登るべし

此頂の火口には

獅子王、熊王、虎王や

狼、大蛇集まりて

晝夜に守り居るに聞く

如何なる猛き獣も

神の賜ひし言靈の

劍にかけて服従はし

神の經綸の火の種を

奪ひ歸らで置くべきや
 此山路は峻しくて
 行き艱めども真心の
 限りを盡し身を盡し
 神の御爲め世の爲めに
 進む吾等にさやるべき
 如何なる曲津もあるべきや
 松、竹、梅よ櫻ごも
 心勇みて従ひ來れ
 一度は不覺はこりつれご

生言靈の力をば
 覺り切りたる吾身魂
 最早恐るゝ事もなし
 あゝ勇ましや面白や
 魔神の集ふ巢窟に
 言靈劔抜きつれて
 吾はすくく進むなり。
 岩根木根踏みさくみつゝ登り行く
 火炎の山は清しくもあるかな。
 見下せば山の麓に白雲は

豊かに遊びて風にゆるげり。
 白雲の空に聳えし此山に
 登りて四方の國形見むかな。
 久方の春の御空にぼんやりこ
 霞むは高光山の姿か。
 高光の山は尊し御桶代の
 神の坐します聖場なりせば。
 朝霧比女永遠に坐します高光の
 山の姿のおごそかなるかも。
 今暫し進めば頂上に達すべし

暫しを此處に息休まさむ』

ミ歌ひつゝ路の邊の萱草を打敷き、ごつかミ臀を下し、松、竹、梅、櫻も、ミもに眼下の四方
 を見渡しながら各自に歌ふ。

松は歌ふ。

「麓邊は百樹茂らひこの邊り

萱草ばかり生ひにけるかな。

雲を抜くこの高山に登り見れば

吾息さへも苦しかりけり。

葭原の國原こまぐら白雲に

包まれさながら海原の如し。

ぼんやりと彼方の空に峙てる

高光山を見れば尊し。

自ら尊さの湧く山なれや

御樋代神の御舎こして」

竹は歌ふ。

「吹く風もいさ冷えくし身にしみて

身は軽々となりし心地す。

若君の後に従ひ登り見れば

早虫の音も聞えずなりぬ。

火炎山の此處は漸く七合目よ

されき鳥の音虫の音もなし。

尾花野に風に靡きて其他の

草木なければ花の香もなし」

梅は歌ふ。

「曲神の集ふ山こは見えぬまで

眺めよろしき聖所なりけり。

曲神は白雲の線を限りにて

麓に群がり棲めるなるらむ。

見の限り葎草茂る原野なり

水上の山は雲の上に浮く。

みはるかす水上山の頂に
 います巖ヶ根司戀しき。
 種々の曲の艱みに遇ひながら
 漸く此處に登り來つるも。
 山風は足の下より吹き來る
 思へば高き山にもあるかな。
 獅子熊や虎狼や大蛇まで
 棲む此の山は火炎吐くなり。
 夜されば烟の光百里餘の
 野邊を照らすと聞くと凄まじ。

若君に従ひ奉り國の爲に
 火種を取りて山降らばや』

櫻は歌ふ。

「言靈の劔あれども心せよ
 曲津の備へ殿しくありせば。
 曲津見は最後の備へを構へつゝ
 吾きためむと待てるなるべし。
 魂に力をこめて登るべし

曲津の棲處早近ければ』

斯く歌ふ折しも、山上より忽ち大岩石の雨、百雷の落ち來る如き音響を立て、五人が身邊

に下り来る其危険き、譬ふるものなし。五人は此處を先途に岩の雨を潜り、辛うじて頂上に達しければ、猛獸毒蛇は強敵こそ御座むなれ、目を怒らせ牙をこぎ、大口開けて咆哮怒號しながら、五人に向つて噛みつき来る。五人の勇者は、何猪口才な、如何なる曲津の妨ぐることも、火種を取らねば置くべきかこ、幕地に燃ゆる火の傍に近寄りたるを見すましたる猛獸毒蛇の群は、生命眼りに襲ひ來り、五人の勇者を口にくはへて各自に振り廻し、忽ち火口に投じ、凱歌を擧げて唸り嘯く聲は、百雷の一つになりて轟くが如し。斯くしてあはれ五人の勇者は、猛烈なる火に焼かれ、白骨となりて火焰の息に翻弄され、高く天に舞ひ上り再び地上に落ち來りけり。

(昭和九・七・二八 舊六・一七 於關東別院南風閣 森良仁謹録)

第三篇 天地變遷

第一六章 火の湖 (11010)

秋男を始め、松、竹、梅、櫻の一行五人が、猛獸の主共に衝へられ、火炎山の火噴火口に投げ込まれ、身体は白骨となりて中空高く昇り、再び山上に落下したるが、稍半時許り経て、火炎山は忽ち大鳴動を始め、前後左右上下に震動し、遂には大爆發して、見る／＼さしもに高き山影は跡形もなく大湖水に變化し、猛獸、毒蛇、水奔鬼の大部分は全滅の厄に遇ひて、その中央に小さき小島を残すのみはなりぬ。この小島に救はれたる精靈は、秋男一行を始め、朝霧夕霧、秋風、野分、秋雨及び僅少なる水奔鬼及び猛獸、毒蛇の小部分なりけり。

こゝに秋男は此島の精靈界の主となりけるが、未だ肉体を有する猛獸、毒蛇の残れるを如何にもして全滅し、こゝに精靈の安全地帯を造らむと、八方辛苦を重ね居たりける。然りも雖も

秋男は最早や精靈なれば、肉体を持つ猛獸、毒蛇に對抗すべき力なく、只天地神明に祈願し、救ひの神の御降臨を待つより外すべもなかりける。

扱て高光山に天降りませる朝霧比女の神、大御照の神、朝空男の神、國生男の神、子心比女の神は、高光山の頂なる巖窟の寶座に集り、遙の西方に當り大爆音聞え、火炎山の天に沖する火焰は、跡形もなく消え失せ、只黒雲の漲れるを望見し、葭原の國土の一部に天變地異のありたるを憂ひ給ひながら、ここ譏り給ふ。朝霧比女の神は御歌詠ませ給ふ。

(註) 天祥地瑞の物語中、神々の御歌詠ませ給ふこあるは、御言葉の意なり。神代は現代人の如く不成立なる言語なく、互に天地の音律に合へる三十一文字を用ひ給ひしが、所謂今日の和歌となれるものにして、歌ひ給ふこ云ふは、申し給ふ又は仰せ給ふ、語り給ふ、宣り給ふの意義を知るべし。神代の神の言葉を、現代人は總て歌ひして扱へるを知るべし。

「見渡せば火炎の山は天地を

動がしにつゝ消え失せにけり。

久方の空をなめたる火の舌も

今は全く見えなくなりけり。

葭原の國土の曲神を言向くる

惠の御火は消え失せにけり。

いかにしてこの葭原を治らさむや

神の寶の御火消えぬれば。

兎に角に火炎の山は消え失せぬ

湖こなりしか心もこなや」

大御照の神は歌ふ。

『吾も亦火炎の山の爆發を

思へば心曇らひにけり。

葭草や水奔草を焼き拂ふ

しぐみの中に火は消えにけり。

葭原の島のこまぐ夜されば

明るかりしを今は是非なし。

濛々天に黒雲ふさがりて

火炎の山は見えずなりけり。

曲津神の數多棲まひし山なれば

御火取る業をためらひ居りしに。

ためらひてある間に御火は消えにけり

この國原を如何に治めむ。

今日よりは御火は消ゆれ言靈の

水火を照して世を治めませ』

御桶代神は歌ひ給ふ。

『汝こそは大御照の神なれば

闇を明せよ生言靈に。

曲津見のその大方は天地の

變異に失すれど火なきが惜しき』

大御照の神は歌ふ。

「吾公の御言葉畏み今日よりは

溪に降りて禊なすべし。

吾禊神の心になふまで

力限りに務めはげまむ」

御桶代神は歌ひ給ふ。

「公が歌聞きて吾魂蘇り

天地開けし心地するかも」

朝空男の神は歌ふ。

「葭原の國土にも高きこの山ゆ

國形見れば火の山峻き。

峻しかりし火炎の山は忽ちに

湖さなりしか姿見えなく。

曲津神數多棲まひしこの山は

神の經綸か消え去りにける。

兎にもあれ豫讚の國原さやぐらむ

許させ給へば吾出で行かむ。

巖ヶ根の神に力を添へながら

豫讚の國原蘇らせむ」

國生男の神は歌ふ。

『吾も亦朝空男の神ミ諸共に

豫讃の國原に進みたく思ふ。

御樋代の神許しませ國生男

吾願ぎごころを何恰に委曲に。

葭原の國土の生き物悉く

惱みてあらむ進ませ給へ』

朝霧比女の神は歌ひ給ふ。

『國生男神の願ひを諾ひて

豫讃の御國の爲遣はさむ。

大御照、子心比女の二柱は

吾右左に仕へ奉れよ。

朝空男、國生男の神鳥船を

早く造りて進み出でませ』

斯く歌ひて奥殿深く入らせ給ひ、大御照の神ミ子心比女の神は、巖窟の口の間に控へて國形を看守り給ふ事となり、朝空男、國生男の二柱は大峽小峽の木を伐り、天の鳥船を七日七夜の日数を重ねて漸くに造り上げ給ひ、兩神はこの鳥船に乗りて中空に翼をうちながら、豫讃の國原さして進ませ給ふ。

朝空男の神は鳥船に身をまかせながら、中空を翔けりつゝ、御歌詠ませ給ふ。

『七日七夜を寝もやらず

國生男神ミ諸共に

大峽小峽の木を伐りて
 目出度くこゝに鳥船を
 造り終へたる嬉しさよ
 吾は空ゆく鳥なれや
 下界を遙に見下せば
 葭原の國土廣々
 あなたこなたに山の尾は
 霧の面に浮びる
 下界はたしかに見えねども
 霧の海原底深く

百の人草鬼大蛇
 虫獸も草も木も

火炎の山の爆發に
 惱みくるしみをのゝきて
 生きたる心地もなかるらむ
 火炎の山は遠くとも
 御空を走る鳥船の
 早き翼に進みなば
 一日の中に到るべし
 御樋代神の天降らし

天の八重雲に比ぶれば
 地上に落つる憂ひなく
 安全無事の空の旅
 あゝさりながらさりながら
 吹き來る風に翼をば
 折られて鳥船逆に
 地上に落つる事もがな
 行手は遠し雲の上
 あゝ惟神々々
 主の大神の御恵に

安く平穩に進ませ給へ
 心安らかに進ませ給へ
 一二三四五六七八九十
 百千萬八千萬
 天津神等國津神
 守らせ給へし願ぎ奉る

國生男の神は歌ふ。

「吾は國生男の神よ
 遙に高き雲の上
 西へくこ進みゆく

天地變遷

この鳥船は鳳凰か
翼の強き真鶴か
心の空も晴れやかに
國形見むこ進み行く
今日の旅こそ樂しけれ
御樋代神の神言もて
主の大神の御稜威
頸に受けて進みゆく
吾等に御幸あれよかし
吾等に光りあれよかし

遠く下界を見渡せば
黒雲白雲交々に
地上を包みて草も木も
人も獸も見え分かず
漂渺千里の海原を
渡るが如き心地かな
今まで空を照したる
火炎の山は影もなし
目標さへもなき空を
進む吾こそ雄々しけれ

火の湖

主の大神の坐す限り
過つこゝなく進み得む

あゝ惟神々々

恩頼をたまへかし』

朝空男の神は鳥船より歌ふ。

『見下せば黒雲白雲群りて

荒海原を進むに似たり。

天と地の中空をゆく鳥船の

こりつく島も見えぬ旅かな。

西東南も北も見え分かぬ

空の海ゆく鳥船あはれ。

吾伊行く空高ければ風もなく

雨は下より降り上るなり。

地の上に醜の曲事現れしか

空のぼり来る雲はにこれり』

國生男の神は歌ふ。

『國津神獸の歎き傳はるか

雲に怪しき聲のふくめる。

高き聲集る方を目的にて

下り着かむかこの鳥船を。

宇宙間何物も見えず只一つ

吾鳥船のあるのみぞかし。

御樋代の神のまします高光の

山の姿も見えずなりけり。

主の神の始めて宇宙に生れませる

時もかくやこ偲ばるゝかな。

葭原の國土廣ければ二夜三夜

走るも萬里の海には到らず。

萬里の海の中にも廣き葭原の

國津御空の定まらぬかな」

兩神は空中を歌ひながら、豫讃の國土の空を靜に八重雲かき分け下らせ給へば、笑ひ姿の棲み居たりし忍ヶ丘の平地に鳥船は安々着きにける。

火炎山一帶約百餘里の地は大湖水に化したれども、忍ヶ丘は幸ひその圏外に置かれて、約一里近くまで湖水は展開し居たりける。二神は此丘に下り立ち、天地の神靈に向つて、感謝の言葉を奏上し數歌をうたはせ給ふ。

朝空男の神は歌ふ。

「久方の朝の空を雄々しくも

渡り來にけり鳥船に乗りて。

雲分けて下りて見れば忍ヶ丘の

思ひがけなき休所なりしよ。

新しき火炎の湖は間近ければ

この丘よりはたしに見ゆるも」

國生男の神は歌ふ。

「煩ひし心の闇も明け放れ

吾恙なく丘の上へ降りぬ。

見渡せば火炎の湖は廣々

ほのかに霧の立昇る見ゆ。

今日よりはこの丘の上に家造り

豫讃の國土をば生かさむと思ふ」

斯く歌ふ折しも、笑ひ婆に生命を奪はれし精靈なる國津神の末子冬男は、熊公、虎公及び山

川、海の三女の精靈も共に、恐るく出て來り、微の聲にて兩神に向ひ感謝の真心を歌ふ。
冬男「久方の天津御空ゆ天降りまし、

二柱の神尊かりけり。

葭原の豫讃の神國は曲津神

伊猛り狂ひて騒がしかりけり。

火炎山爆發によりて曲津神の

その大方は亡び失せたり。

吾こそは巖ケ根の末子冬男なり

今はこの世の者にあらねき。

水奔鬼の笑ひ婆アにはかられて

現の生命を奪はれし吾。

御前に打ち伏すこれの友垣は

皆精靈さなりにけらしな。

二柱天降り給ひし今日よりは

精靈界も安くあるべし』

熊は歌ふ。

『吾も亦巖ヶ根の君に仕へたる

下僕なれども現身はなし。

虎公もこの三人の乙女等も

みな精靈よあはれみ給へ』

朝空男の神は歌ふ。

『かねて聞く水奔鬼の棲む里は

いづれにあるや具に語らへ』

冬男は歌ふ。

『水奔鬼の司笑ひの婆アさんが

棲みにし丘はこゝなりにけり。

吾々の力に恐れ笑ひ婆は

火炎の山をさして逃げたり。

火炎山湖水さなりし上からは

笑ひ婆アも亡びしなるらむ』

國生男の神

「珍らしき吾は話を聞きにけり

笑ひ婆アを追ひやりしこは。

精靈こいへぎも冬男のたましひの

強き力に吾はあきれし」

山は歌ふ。

「吾こそは冬男の妻の精靈よ

守らせ給へ二柱の神。

御樋代の神の神言に天降りまし、

尊き神に會ふぞ嬉しき。

斯くならば葭原の國土は安からむ

現界神界幽界なべて」

川は歌ふ。

「水奔鬼笑ひ婆アの謀計に

みたまこなりし川は吾なり。

虎公の精靈が妻に吾なりて

忍ヶ丘に年をふりけり。

二柱尊き神の出でましに

精靈吾は蘇りたり」

海は歌ふ。

「虎公が精靈の妻 吾は海

尊き神の前に立つかな

今日よりは吾等を憐れみ給ひつゝ

曲津神等をきたため給はれ

待ちくし御樋代神の御使ひ

忍ヶ丘に天降りましけり」

朝空男の神は歌ふ。

「吾等二神こゝに降りし上からは

心安かれ永久に守らむ」

斯く互に歌ひつゝ、その夜は忍ヶ丘の冬男が館に息を休めける。

(昭和九・七・三〇 舊六・一九 於關東別院南風閣 谷前清子謹録)

秋ふかみ丹波の朝は風寒く

木の子をもやす木犀は匂ふ

山も野も黄金色なる此秋を

吾は皇道の爲に旅すも

日に月に行きつまるなる日の本を

坐視に忍びず雄健なすなり

第十七章 水 火 垣 (二〇二)

火炎山の爆發により、附近百里の地は全く湖水となり、湖水は熱湯の如く煮えくり返り、猛獸、毒蛇、イデチ等の毒虫も大半殲滅の厄に遇ひけるが、中にも最も甲羅の強く、鱗の堅き爬虫族は、湖水の岸邊に集り來り、汀邊の水奔草や葎草の中にもぐり込み、一層其の害毒甚しくなりゆくこそ歎てけれ。

朝空男、國生男二神が天降りたる忍ヶ丘は、陥落の難は免れたれども、約一里附近まで湖水の展開せるより、あらゆる曲津は忍ヶ丘に向つて、幾百千も限りなく上り來る物凄さ、名狀すべからず。

秋男、熊公、虎公、山、川、海の精靈は、忍ヶ丘のわが住處には一步も踏み入れさせじ

全力を盡し戦へども、悲しきかな精靈の身の上なれば、形体を持てる惡魔の襲來を喰ひ止むる由もなく、苦心を極め居たりける。こゝに、天の鳥船に乗りて天降りましたる二柱の神の神力に力を得て、稍落着きながら御前に恐るゝ進み寄り、

「火の湖の現れしより曲神は

處失ひ集ひ來むす。

二柱神の天降りし間もあらず

曲津は此處に押し寄せ來る。

力限り防げし精靈わが力

如何で及ばむ救はせ給へ」

これを聞くより二神は立ち上り、忍ヶ丘の常磐樹の幹に御身を支へながら、

朝空男の神は歌ふ。

「葭原の豫讃の國原治むべく

天降りしわれよ心安かれ。

如何ならむ曲鬼大蛇押しよすも

われはやはらむ生言靈に」

國牛男の神は歌ふ。

「朝夕に神ミ力を一つにし

忍ヶ丘を安く守らむ」

冬男は歌ふ。

「有難し二柱神の御宣示

聞きてわれらは蘇りぬる」

朝空男の神は歌ふ。

「汝れ等は精靈なれむわが宣らむ

生言靈を補ひまつれ」

冬男は歌ふ。

「御宣示頸に受けて力限り

われ等は宣らむ生言靈を」

かゝる折しも、阿鼻叫喚の聲、鬨の聲、一時にドツミ起り、猛獸、毒蛇、水奔鬼は最も平安なる棲處として忍ヶ丘の麓に集り來り、咆哮怒號するあり、のたうちまはるあり、忍ヶ丘のまはりには水奔鬼の矢叫の聲かしましく、一齊に上らむさせしも、二神等の生言靈に妨げられて

上りあぐみたるぞ面白き。二神及び冬男以下の精靈は、交るく生言靈を宣る。
朝空男の神は音吐朗々として歌ふ。

『主の神の御水火に現れにし言靈を

國の鎮めさ清けく宣らむ。

アオウエイ天地處を變ふるこも

たゞに鎮めむ貴の言靈に。

幾萬の曲神襲ひ來るこも

斬りて放らむ言靈劍に。

麗しき殿の言靈幸はひて

この國原の曲言向けむ。

炎々こ燃えたちし火口は忽ちに

消えて湖水こなりにけらしな。

鬼大蛇たこへ幾萬寄せ來こも

恐るべきかは天津神われは。

火炎山忽ち湖こなり果てぬ

生言靈の幸はひによりて。

木も草も火の湖の底深く

沈みけるかな曲の荒びに。

國土生むこ天降り來りしわれなれば

鬼も大蛇も物の數かは。

汚れたるこの國原も言靈の
 水火幸はひて澄み渡るべし。
 心悪しき曲鬼さもの身の果ては
 ありく見えぬ湖水の波に。
 牙え渡る月の光も見えぬまで
 御空曇りぬ曲津の水火に。
 白雲の空を渡りて天降りてし
 われ天津神よ曲等恐れじ。
 迫り來る鬼や大蛇は多くこも
 忍ヶ丘には光る玉あり。

譏り婆笑ひ婆アの水奔鬼も
 今は手向ふ力無からむ。
 高山の火口は忽ち湖の
 底に沈みて湧きたつ湯の波。
 千早振る主の大神の賜ひてし
 生言靈に及向ひ得むや。
 月も日もかくれて見えぬ葭原の
 國土を照らして安く治めむ。
 天も地もわが言靈の功績に
 晴れゆく力を曲は知らずや。

常闇のこの國原を伊照らすこ

言靈鏡持ちて天降りし』

國生男の神は歌ふ。

『波の上をわが見渡せば鬼大蛇

溺るゝさまの淺ましきかな。

煮え返る湖水の波にもまれつゝ

大蛇は血を吐き悶え居るかも。

奴羽玉の闇は襲へり曲津見の

曲の吐く息いや重なれば。

懇に生言靈を宣りつれご

曲の耳には入らざるこ見ゆ。

野も山も火炎の山の爆發に

戦きにけむ草木は枯れたり。

果敢なかる世の状なれや地の上の

曲悉く亡びむこすも。

低山は湖に没して火炎山

頂狭く水に浮べり。

降る雨も激しかりけむ湖は

低山高山皆浸しつゝ。

曲津見も火炎の山の變動に

恐れ戦き身亡せけるかな。

ほのくゞ霧を透して見ゆる湖の

夕の眺めは淋しかりけり。

曲神の生命の果てか関の聲

この丘下ゆ聞え來るなり。

見の限り醜草生ふる大野原を

生言靈の幸に清めむ。

昔より例もあらぬ天地の

變動は神の戒めなるらむ。

目を開けて見られぬまでにぢらしき

この國原は神のいましめよ。

濛々く黒雲低う葭原の

野空包みて月日は見えぬ。

八千尋の湖水の底に曲津見は

又も潜みて災爲すらむ。

如何程に曲津見大蛇荒ぶとも

神の御稜威に言向け和さむ。

湯の如く沸き返りたる湖の

水面に湯氣は立ち昇りつゝ。

遠近の區別もしらに災の

神のいましめ畏きろかも。
世を救ふ誠の力は言靈の

貴の功に如くものはなし。

われこそは御桶代神に仕へたる

生言靈の司なるぞや。

いち早く忍ヶ丘に天降り来て

葭原國の状を見しかな。

美はしき神の御國を生まむこて

われは降り神言帯びつゝ。

ゑらくに歡ぎ賑はふ神國を

生まで置くべき力限りに。

大蛇棲む葭原國もわがあれば

いさ安からむ勇みてあれよ』

冬男は歌ふ。

『三柱神の天降らすこの丘に

われ蘇り曲を防がむ。

二柱神の言靈幸はひて

わがたましひの力添はりぬ。

かくなれば精靈われも勇ましく

鬼の砦に向ひ進まむ。

現世の人と生れし心地かな

わが靈身の輝き初むれば。

永年を忍ケ丘の鬼となりて

岐美の天降りを待ちわびにける。

浅ましきみたまのわれも今日よりは

神の御後に仕へまつらむ。

蘇り生きの生命を保ちつゝ

幽世の花となるぞ嬉しき。

浮腰のわがたましひも落着きて

動かぬ心勇みたつなり。

鬼大蛇醜の鬼婆攻め來こも

最早や恐れじ神なるわれは。

矢叫びの聲は籠にごよめけり

鬼も大蛇も登らむこして。

言靈の水火垣高く築きませば

如何なる曲も登り得ざらむ。

神々の貴の恵みに抱かれて

安く過ぎなむ忍ケ丘に。

狭霧たつ火の湖も恐れむや

如何なる曲のよし潜むこも。

水奔鬼魍魎曲靈數の限り

寄せて來るも何か恐れむ

熊公は歌ふ。

「思ひきや二柱神の出でまして

國土の災除かせ給へり。

われは今忍ケ丘の鬼ミなれき

元津みたまは神なりにけり。

たましひは元より清し惟神

神に受けたる生命なりせば。

水奔鬼に追ひたてられて長き日を

清水ケ丘にひそみたりける。

虎公ミ二人淋しく潜みたる

清水ケ丘を思へば悲しき。

わが君も笑ひ婆アに計られて

清水ケ丘に身亡せ給ひぬ

朝空男の神は歌ふ。

「種々の汝が物語聞くにつけ

曲の猛びの強きをささる。

葭原の國土は曲津の影もなく

清め澄まさむ神なるわれは

虎公は歌ふ。

『ありがたし貴の御神の御言葉

われは忘れじ幾世経るこも』

山は歌ふ。

『妾にて鬼にはあらず惟神

神の誠の御子なりしはや。

旅ゆきて忍ヶ丘に立ち寄りつ

笑ひ婆アに生命を奪はれし。

鬼婆に玉の生命を奪はれし

人のみたまは數限りなし。

二柱神の御稜威に水奔鬼の

影を地上に消させ給はれ』

國生男の神は歌ふ。

『果てしなき廣き國原隈もなく

清め澄まして曲滅さむ。

兎にもあれ角にもあれやこの丘に

館つくりて國土を治めむ』

川は歌ふ。

『天地の神の光りのあれまして

葭原の闇晴れそめにけり。

われもて同じ運命をたぎり來て

鬼となりける乙女なるぞや。

今日よりは曇り心照りあかし

生言靈を宣り續くべし』

海は歌ふ。

『海山の恵みをうけてわれは今』

忍ヶ丘に安く居るかも』

冬男は歌ふ。

『果てしなき葭原の國土隈もなく

照らさせ給へ二柱神。』

力なきわれにはあれき御後に

從ひ神業に仕へまつらむ、

熊も虎も山川海も神業に

使はせ給へこひのみまつる』

朝空男の神は歌ふ。

『汝が願ひ諾ひわれは國生男』

暫時を此處にミヨマリ治めむ』

かく歌ひ給ひて、火の湖の平穩に復する日を持たせ給ひける。忍ヶ丘の麓には數萬の猛獸
毒蛇、水奔鬼なぎ、逃場を失ひ、右往左往にひしめきあへりけり。

(昭和九・七・三〇 舊六・一九 於關東別院南風閣 林彌生謹録)